



第557号

公益財団法人 千鳥ヶ淵 戦没者墓苑奉仕会
102-0075 千代田区三番町2
電話 03 (3261) 6700
FAX 03 (3261) 6712



http://www.boen.or.jp
郵便振替口座 00140-2-42556

編集人 榊枝 宗男
発行人 杉本 順則

コロナ禍続く3年目の夏

戦没者慰霊の灯は継続

例年、戦没者慰霊で賑わいを見せる孟蘭盆から終戦の日この時期は、今年も新型コロナウイルス感染症の「第7派」の襲来で全国的に感染が危惧されている中であった。慰霊行事実施団体より、実施の可否について多数の問い合わせがあったが、各団体の判断に委ねたところ、慰霊行事については参加規模の縮小などのコロナ対策を取りながらほぼ例年並みに執り行われた。特に、慰霊行事を予定している各主催団体に対して、「慰霊行事実施要領」という独自のガイドラインを示し、昨年に引き続き感染防止に留意して行事を実施することをお願いした。その甲斐もあって、7月の孟蘭盆時期と8月の終戦の日この時期には、例年慰霊行事を実施しているほぼ全ての団体により慰霊行事が執り行われ、新型コロナウイルス感染症発生以前と同様に「慰霊奉賛の灯」を継続して灯すことができた。



終戦の日 戦没者追悼の参拝者の皆さん

15日には、兵庫県遺族会の他、昨年と同様に多くの個人参拝者が訪れた。また、全国戦没者追悼式に先立ち、岸田文雄内閣総理大臣をはじめ松野博一官房長官、加藤勝信厚生労働大臣、西村明宏環境大臣、谷公一国家公安委員長等の関係や多くの国会議員による参拝があった。なお、鈴木俊一奉仕会会長が、岸田総理はじめ閣僚の案内役を務めた。コロナ禍が継続している3年目の夏、連日の猛暑にもかかわらず、予想外に多くの参拝者を迎えることができた。この秋以降にも多くの団体による慰霊行事が計画されており、引き続き個人会員や関係団体による参拝を切にお願いしたい。

岸田総理大臣の参拝

8月15日、日本武道館において、天皇皇后両陛下の行幸啓を仰ぎ、政府主催の全国戦没者追悼式が挙行されたが、この式典に先立ち岸田文雄内閣総理大臣が千鳥ヶ淵戦没者墓苑を参拝し、先の大戦の戦没者に対して哀悼の誠が捧げられた。今回岸田総理の参拝にあたっては、警備要領の検討を警視庁SP、所轄の麹町署警備課、環境省管理事務所、奉仕会が一体となつて行い、安全かつ整齊と総理、閣僚の参拝が実施された。



日蓮宗戦没者追善供養並世界立正平和祈願法要

8月15日、日蓮宗主催の千鳥ヶ淵戦没者追善供養並世界立正平和祈願法要が執り行われた。午前9時、法要は大導師である田中忠神宗務総長が墓前に着座して開始された。宗歌斉唱に始まり、道場偈、勸請、開経偈と続き、読経の際には参列者全員が焼香した。その後、修法、表白、唱題、回向、四誓、奉送と続き戦没者のご冥福をお祈りした。最後に導師である田中忠神宗務総長より挨拶があり、「本年は先の大戦が終結を迎え、七十七年目を迎えます。時の流れの中で戦争の傷跡は風化するも、その身を以て戦争を体験した方々も、数少なくなりつつあります。かくいう私も、戦争を体験ではなく、史実として捉える世代の人間でありますので、後進の人々に、その凄惨さを説くことはできません。しかしながら、我々戦後の世に生まれた者の役割とは、その史実に向き合い、

数多くの犠牲によって、世界の歴史、文明が紡がれてきたことを決して忘れぬことではないかと思えます。今も世界各所では終わりの見えぬ戦いが繰り返られており、理由の如何を問わず、暴力によって解決される問題などは存在せず、そこから生み出されるものもまた皆無であります。正に、私達が生きるこの日常は、先人たちの命によって紡がれた、有り難き時間の積み重ねなのであります。一人でも多くの人々が、過ぎし日の戦禍に思いを馳せ、各々の国を想うことにより、恒久なる安寧が一日も早く実現することを願って止みません」と結び、法要は終了した。



新日本宗教青年会連盟主催による戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典

8月14日、新日本宗教青年会連盟(新宗連青年会)主催による「第57回戦争犠牲者慰霊並びに平和祈願式典」が約100名の青年会会員等が参加して執り行われた。式典は午後6時に開始され、新宗連青年会宮本泰克委員長による挨拶の後、参加12教団による教団別の拝礼、平和へのメッセージ、平和の祈り(黙祷)の順で執り行われ代表挨拶として新宗連石倉寿一理事長が挨拶をした。なお、本法要は昨年引き続きインターネットによるライブ中継が行われた。宮本委員長は挨拶において「新型コロナウイルス



染症下での生活も2年半になりました。これまで新型コロナウイルスの犠牲となられた方々の「冥福をお祈りします」とともに、長期にわたって懸命にこ対応下さった医療従事者をはじめとする方々に心から感謝申し上げます。現在はロシアによるウクライナ侵攻という、想像もできなかった世界情勢のまっただ中です。私たちに何ができるのかと自問し、無力感で苦しむこともあります。しかし、私たち宗教者は祈ることが出来ます。中継を通じて全国の仲間とつながっていることを感じながら、教義や信条の違いを乗り越え、それぞれの礼拝の様式に則り、千鳥ヶ淵戦没者墓苑にお鎮まりになられている37万休以上の御霊をはじめ、すべての戦争犠牲者に対する慰霊と、真の世界平和実現に向けて、共に祈りを捧げていただきます。今年には日本が主権を回復して70年、そして沖繩が本土復帰して50年の節目を迎えました。新宗連青年会では毎年、沖繩に慰霊団を派遣してありますが、コロナ禍以降、中止となっております。戦後77年が経ち、平和な時代を享受してきた日本では、戦争の記憶が風化しつつありました。しかし、今も世界では、ウクライナや、新宗連青年会でもアジア青年平和使節団を派遣したミャンマーなど各地で、戦争や紛争、人道危機が起こっています。私たち宗教青年が先頭に立ち、未来へ平和のバトンをつないでいきたいと思えます。」と述べた。

フォーラム平和・人権・環境 戦争犠牲者追悼、平和を誓う8・15集会

8月15日、正午の黙祷に始まり、勝島一博フォーラム平和・人権・環境共同代表、近藤昭一立憲民主党衆議院議員、福島みずほ社会民主党党首、阿部知子立憲フォーラム副代表、内田雅敏戦争をさせない100人委員会事務局局長等による



「誓いのことば」が述べられ、その後献花が行われ式典は終了した。勝島代表は「戦後77年が経過した今も地上では戦争行為がなくなることはなく、ロシアとウクライナの戦闘の中で、多くの尊い命が奪われるとともに町が破壊され、虐殺・拷問・暴行・略奪などの犯罪が報じられています。このことは、ひとたび戦争という極限状態では人間は想像を絶する残虐な行為に至ることを物語っており、いかなる理由があつたとしても戦争行為は勿論、戦争に至るような国づくりを許してはなりません。歴史の忘却に抗い憲法の理念の実現に向け歩みを進める」と力強く述べた。

千代田区戦没者追悼式



7月13日(水)、千代田区主催の戦没者追悼式が、ご遺族等関係者約1500名が参加し行われた。小雨が降り夕闇迫る中、午後6時30分、開式が宣言され、その後海洋少年団が篝火台に点火、黙祷、国歌演奏が行われた。引き続き樋口千代田区長、区議会議員、遺族会代表の追悼の辞があり、樋口区長は「今日の平和と繁栄は、戦火による尊い命の犠牲と果てしない悲しみの上に築かれたものであることを風化させることなく、次世代に継ぐことが私達の使命です」と述べた。次いで平和使節団団員による「平和への決意」を、その後、参加者全員による献花が行われ式典は終了した。



妙智會教團千鳥ヶ淵 戦没者墓苑うら盆供養

7月14日(水)、妙智會教團主催の千鳥ヶ淵戦没者墓苑うら盆供養が約百名の参加者のもと行われた。生憎の雨模様だったが午後1時、「玄題三唱」により式典が開始され、ブラスバンドが「威風堂々」の曲を演奏する中、青年男女16名による献灯、献華、献供の儀が行われた。この後、導師妙智會宮本恵司法嗣が入堂、御祈願、読経が厳肅に執り行われた。引き続きコーラス隊による唱歌「ふるさと」に引き続き「夕やけ小やけ」が奉唱された。この後宮本法嗣から、「国の争いは人の争いです。その争いの元は人の心です。戦没者うら盆を機に自分の心を一一つ改める修行をお願いします」との挨拶があり、その後全員が前屋にて焼香して式典は終了した。妙智會教團は戦没者墓苑が創建された翌年の昭和35年以来、毎年欠かさず、うら盆供養を行っている。



会教團は戦没者墓苑が創建された翌年の昭和35年以来、毎年欠かさず、うら盆供養を行っている。

阿含宗関東別院 太平洋戦争戦没者供養 護摩法要千鳥ヶ淵万燈会

7月15日、阿含宗による太平洋戦争戦没者供養護摩法要千鳥ヶ淵万燈会が営まれた。本護摩法要は平成6年以来行われており、戦没者の御霊に対して多数の万燈を献じるとともに、「ご英霊の安らぎを祈り感謝の誠を捧げるために執り行われている。昨年に引き続き本年も、新型コロナウイルス蔓延に伴い、参加者等の規模を縮小して執り行われたものの、信者の思いを込めた万燈が設置された。午後6時半、三千以上の万燈が点灯される中、導師清川靖法中僧正が入堂し式典が始まった。法要では国歌斉唱、喇叭保存会による「国



の鎮め」吹奏に続き、御神楽奉納「浦安の舞」が行われた。引き続き護摩法要が開始され、六角堂内では護摩が焚かれ、

真つ赤な炎の中真言が唱和された。その後、映画上映に引き続き、来賓祝辞が行われ、引き続き導師の清川靖法中僧正から挨拶があり「今年になってから世界的情勢は急変し、日本を取り巻く状況も緊迫の度合いを増しつつあります。本年の千鳥ヶ淵万燈法要では特に先の大戦でソ連と直接戦闘し自ら盾となって国土を守った御英霊、戦没者に心から感謝して懺太や占守島での戦没者、また、シベリアで亡くなられた旧ソ連抑留犠牲者の追悼供養のために多くの万燈を捧げて法要を執り行いました。開祖は『國のために命を捧げた御英霊への供養をせずして、國家が安泰となり、國民に安穩と繁栄をもたらされることはない』との思いを以て、御英霊への鎮魂解脱のご供養を続けてまいりました。私も阿含宗は今後もこの開祖の志を受け継いで、御英霊、戦没者のご供養を続けてまいります。」と述べ、戦没者慰霊継続への強い意志が披露された。その後、音楽家の独唱による「海ゆかば」、「ふるさと」が鎮魂歌奉納として行われた後、喇叭保存会による鎮魂喇叭「消灯」、「巡検」が奉納吹奏として行われ法要は終了した。法要終了後には、参加者全員が焼香した。なお、本法要は奉仕会のインターネット回線を利用して生中継された。

「論壇チャンネル」の取材受け

7月8日(金)、インターネットを媒体とする「論壇チャンネル」の取材チームが来苑し、墓苑全景の撮影後インタビュー収録を行った。同取材チーム8



名は麗澤大学川久保剛教授を長に、帝京大学井上義和教授ほか学生3名と映像及び音声収録の各担当者からなる。井上教授が提唱する「三社巡り」として、千鳥ヶ

座間三郎実行委員長による謝辞で終了した。座間実行委員長の式辞において「日本人の強制抑留から77年が経過した今日、同じ状況がウクライナで繰り返されておられます。毎年、抑留体験の苦労を語り継ぐ集いを開催し二度とこのような悲劇を繰り返さないようにと多くの方々から訴え続けています。亡くなられた皆様の御霊の安らかならんことを心からお祈り申し上げます」(要旨抜粋)と述べた。

「硫黄島における遺骨収集④」完 硫黄島戦没者遺骨収集派遣に参加して

10月18日(月曜日)・・・(自衛隊による御遺骨見送り式・離島・入間基地における儀仗) 水交会 渡部 幹昭

08・50までに各自全ての荷物(手荷物も含む)を宿舎玄関前に搬出、09・00入間基地行き貨物輸送用パレットに搭載した。各自の全荷物をここで積み込む理由は、御遺骨の捧持者は御遺骨だけを捧持するため所持する荷物は身分証明書、スマートフォン、財布等、内地到着後必要最小限かつ正装した服に収納できる物品しか携行できないためであり捧持者以外の団員も同様であった。

令和4年度シベリア抑留 関係者埼玉県慰霊祭

8月16日、全国強制抑留者協会埼玉県支部による慰霊行事に約20名が参加し、執り行われた。行事は墓苑東側に位置する戦後強制抑留・引揚死没者慰霊碑の前で行われた。



慰霊行事は10時から前川佳也副実行委員長長の開式の辞に始まり、黙祷、式辞、追悼の言葉、献花などが行われ、最後に



空自衛隊入間基地に到着。飛行場エプロンには航空自衛隊儀仗隊が整列していた。降機後、団長を先頭に御遺骨を捧持して

1列で進み同儀仗隊に正対してラッパ「悲しみの譜」の流れる中、御遺骨が儀仗を受けた。「入間ターミナル」にて小憩のち、17・00、同基地を出発し関越自動車道・首都高速5号線経由で18・40、宿舎であるKKRホテル東京に着して同ホテル「平安の間」に御遺骨を安置・拝礼し本日の任務を終了した。10月19日(火曜日)・・・(硫黄島戦没者遺骨引渡式・解団式)

09・30、御遺骨安置場所に全員集合し、拝礼の後、御遺骨を捧持しバスに乗りして同ホテルを出発、一路千鳥ヶ淵戦没者墓苑に向かった。折から雨模様で天気であったが10・30、同墓苑に到着、降車後山本厚生労働副大臣及び来賓等が御遺骨を出迎える中、団長を先頭に御遺骨捧持者、その他の団員の順に同墓苑納骨堂前に設置された「硫黄島戦没者遺骨引渡式」式場の遺骨引渡台に向かつて進み、捧持者は2人ずつ御遺骨を遺骨引渡台上に安置し拝礼、これを厚生労働省職員が拝礼して拝受し安置台に安置した。次に全員で御遺骨に対し拝礼して、山本厚生労働副大臣以下来賓が献花を行いその後同省職員が御遺骨を捧持してバスに乗りし厚生労働省に向かった。10・50、引き続き解団式が同副大臣出席の下行われ、団長から帰還報告、同副大臣の挨拶、最後に団長から解団の言葉があった。これをもち令和3年度第2回硫黄島戦没者遺骨収集派遣の任務は全て完了した。

3 所感

今回の硫黄島戦没者遺骨収集派遣に際して自分が感じた点について三つ述べたい。第一点は「硫黄島の御遺骨収集にあと

何年を要するのか、第二点は「硫黄島における戦没者遺骨収集時の遺留品の取り扱いについて」である。第一点の「硫黄島の御遺骨収集にあと何年を要するのか」については、厚生労働省ホームページ「地域別戦没者遺骨収容概見図」(令和3年9月末現在)によれば硫黄島における戦没者概数21,900名、収容遺骨概数10,520名、未収容遺骨概数11,380名と記載されていた。また、同ホームページ「硫黄島における遺骨収集等の現状」(平成29年3月31日現在)によれば平成16年から同28年までの13年間に御遺骨1,978柱が収容され、年により増減はあるもののこの間の御遺骨収容数の年平均は1年当たり152柱となった。単純計算すると未収容遺骨概数11,380名の御遺骨を現在のペース(年平均152柱)で全て収容するには硫黄島だけであと74年以上かかる計算となった。終戦により陸海軍が廃止され、その復員業務を引き継いだことを出発点とする厚生労働省の所管業務としての遺骨収集は、この一点からしても終戦以来76年以上経過した現在、その組織力、効率性、妥当性などを再考し抜本的に改革する時期にきていると痛感した。

第二点の「硫黄島における戦没者遺骨収集時の遺留品の取り扱いについて」は、10月14日の全体ミーティングの際、厚生労働省と「日本戦没者遺骨収集推進協会」の職員の間で議論があった。それは御遺骨収容場所から氏名等記載された遺留品(今回は認識票等)が何点か発見されたがその持ち帰りに関してであった。遺骨収容作業の実質的作業要領である同省作成の「別添 七つの心得・手順書等(硫黄島)」(令和2年9月10日現在)(全団員に事前配布され必読指定)には「9 遺留品の取扱い」の項目に「(一)遺留品は、所有者を特定する手掛かりとなる氏名等が記されているものに限り収容し、持ち帰ることを原則とする」と記載があり、これを根拠に持ち帰りを主張する「日本戦没者遺骨収集推進協会」に対し、厚生労働省は同手順書については、海外における収集を対象としており同資料には記載されていないが硫黄島はその例外で遺留品については現物ではなく写真を持ち帰り現物は硫黄島で保管することとしているとの主張であった。全戦没者遺骨収集地域から持ち帰った遺留品については、厚生労働省庁舎内にある遺留品保管倉庫の収容容量は限りがあること、海外から持ち帰った遺留品の数量は膨大なものになることなどを勘案すると、その保管・管理については運用上硫黄島は例外とするという(第三面につづく)

(第二面からつづく) 解釈にならざるを得ないのかもしれない。今回発見した5枚の認識票は硫黄島現地に於いて洗浄作業を行った結果、幸いにして記載事項について判読できたことであった。しかし、関係者からはこれまで現地において判読できなかった認識票もまた多くあったと聞いた。そこでこれまで硫黄島から持ち帰らなかった認識票を完全に判読し御遺骨の身元特定につなげるためにはどのような方法を用いれば可能なのか知人の表面工学系の科学者に照会したところ「錆は金属性の素材表面が大気中の酸素と結合して生成した「膜」でありこの膜の最表層は総じて面粗度(表面の粗さ)が高くなり光の反射を妨げるため人間の目で読み取る際には非常に読みづらくなってしまう原因となる※①。そこで錆を落とす(酸化層の除膜)ことで判読可能な状態となる。

旧軍の認識票の大半は真鍮製※②であり茶褐色に変色していることで判読を阻害していると推測される。また、認識票の最表層と刻印された文字等の形状に沿った酸化層が形成されていると推測できる。よって硫黄島現地で実施可能な錆の除去方法は重曹またはクエン酸による拭き取りあるいは漬け置き洗浄が適切である。さらに重曹・クエン酸は食品添加物であり毒劇物ではないことから世界中において広く使用可能で安全に復元できる方法である。

しかし、より正確な判読には「3次元レーザー顕微鏡」や「X線透過」による方法が提案される。「3次元レーザー顕微鏡」はレーザー光でスキャニングし、形状を計測して画像ソフトにより視覚化することが可能な技術である。「X線透過」は非破壊検査等に広汎に用いられている技法で明瞭な判読が可能となると考えられる。何れの方法も分析技術としてはごく一般的な方法であるため精度が高く安価にできる方法と言える。」との回答があった。「3次元レーザー顕微鏡」や「X線透過」といった高

度な科学機材を駆使できる環境にない硫黄島においては洗浄以外の高度な判読作業は不可能である。今回は認識票を例に挙げたが、種々の遺留品であっても科学技術の進歩が著しい今日、高度な科学技術を活用・駆使した様々な方法により遺留品の判読を行い収容した御遺骨の身元解明につなげることができると考える。従って厚生労働省作成の「別添 七つの心得・手順書等(硫黄島)」(令和2年9月10日現在)の中の「御遺族への御遺骨の返還に向けた戦没者の遺骨収集における七つの心得」の基本理念として「1 遠い異郷の地に眠る戦没者や御遺骨の帰還を長年待つ御遺族の心情に寄り添い、責任と使命感を持って遺骨収集に臨むこと」と謳っている以上、判読作業の高精度化を図るため御遺骨の身元解明につながる遺留品については手順書「9 遺留品の取扱い」の項目の記載に従い御遺骨とともに遺留品を持ち帰り、現物によってあらゆる方法を活用して判読作業を実施し御遺骨の身元解明を行うことは必然であると思料した。

度な科学機材を駆使できる環境にない硫黄島においては洗浄以外の高度な判読作業は不可能である。今回は認識票を例に挙げたが、種々の遺留品であっても科学技術の進歩が著しい今日、高度な科学技術を活用・駆使した様々な方法により遺留品の判読を行い収容した御遺骨の身元解明につなげることができると考える。従って厚生労働省作成の「別添 七つの心得・手順書等(硫黄島)」(令和2年9月10日現在)の中の「御遺族への御遺骨の返還に向けた戦没者の遺骨収集における七つの心得」の基本理念として「1 遠い異郷の地に眠る戦没者や御遺骨の帰還を長年待つ御遺族の心情に寄り添い、責任と使命感を持って遺骨収集に臨むこと」と謳っている以上、判読作業の高精度化を図るため御遺骨の身元解明につながる遺留品については手順書「9 遺留品の取扱い」の項目の記載に従い御遺骨とともに遺留品を持ち帰り、現物によってあらゆる方法を活用して判読作業を実施し御遺骨の身元解明を行うことは必然であると思料した。

4 さいごに 初めての参加で御遺骨の捧持という大役を仰せつかり、自分が捧持させていただいた御遺骨は記号・番号で甚だ申し訳ないことではあるが「R3-2-233-J-25-①」であった。実はこの御遺骨は10月9日、自分も収容作業に携わり、また収容した御遺骨を納めた御遺骨袋を捜索現場から現地安置室まで初めて捧持させていただいた。そのよなことから捧持しながらこの御遺骨の英霊はどのような方であったのか、戦死された状況、御遺族はどうされているのかなど様々なことに思いを巡らせるとともに、内地に御帰還された後、DNA鑑定等のあらゆる手段を駆使してどうか1日も早く御遺族のもとに帰ることができまますようにと切に願った。今回、硫黄島戦没者遺骨収集派遣において収容された10柱の御遺骨に対して、また、今なお硫黄島に眠られる英霊に

対して、御霊の安からんことを祈念し、数十年前、靖國神社に掲載され感銘を受けた大江一二三陸軍少佐の詠まれた歌をここに記す。 靖國の宮に御霊は鎮まるも をりをかえれ母の夢路に

これまで記載した内容はあくまでも個人の意見・感想であることを明記する。 参考文獻 ※① 仲田進一・銅及び銅合金の変色について防衛技術 ※② 札幌市平和バーチャル資料館HP

オーストラリア副首相兼ねて 国防大臣の参拝



豪リチャード・マルーズ副首相兼ねて国防大臣、ダレック・モリ

アーティ国防次官、アングス・キャンベル国軍司令官(大将)、在京豪大使館国防武官ソニア・ハロラン大佐が6月7日公式参拝された。豪国防武官の説明によると、豪国において戦没者への慰霊・畏敬は特に重視されており、副首相の強い希望で今回の滞在間、総理表敬、防衛大臣との会談等多忙な外交日程の間を縫って来苑された。外国高官の参拝は、7年前の米国ケリー国務長官・ヘーゲル国防長官の参拝以来であり、今後、外国高官が墓苑を諸外国における「無名戦士の墓」と同じ位置づけとされ、外交日程に組み込んで頂くよう期待したい。花輪には「国難に殉じられた方々に心からの敬意を込めて」オーストラリア副首相兼ね国防大臣リチャード・マルーズと添え書きがあった。

各団体の慰霊参拝



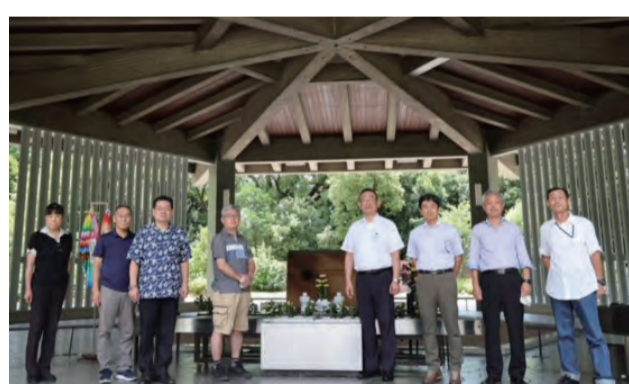
長崎県連合遺族会 (4.7.13)



千代田区海洋少年団 (4.7.13)



洗心懇談会 (4.7.20)



全国警親会連合会 (4.7.30)



桜晴れ戦没者慰霊奉仕団 (4.7.31)



水交会月例参拝 (4.8.18)

- ◎奉納、参拝団体・参拝者(敬称略、順不同)
 - クラスノヤルスク遺族会、愛知県遺族連合会、普明会教団、妙智會教団、阿含宗関東別院、解脱会南新宿支部、解脱会大森八幡支部、水交会、全国警親会連合会、杉村勝治、笹隆治・哲子、安元博美、横山秀夫、秀平良子、サムリス・トゥサンティア、山田寛祥、沼田誠廣川貞雄
 - ◎奉仕会年度会費納入(団体・個人)(敬称略、順不同)
 - 高知遺族会、福岡県借行会、全国強制抑留者協会サンエイト企画、柴田榮一良、本橋邦夫、古谷野次雄山本由美子、市来サツ子、中川昌久、小柴明子、稲葉久江、柴田誠悦、今井敏夫、野口修、遠矢みち子、新井茂、山本順生、坂田七郎、植田清三郎、亀山和子、亀山恒夫、野澤和浩、鈴木純夫、齋藤宣明、永野充山田フヨ、白坂忠良、中村妙子、藤田憲二、荒井紀子國澤輝夫、長谷部文雄、勝見登志子、山崎敏哉、澤田國光、平塚龍哉
 - ◎新入会員(敬称略、順不同)
 - 山本行徳、松本加代子、佐原久美、馬場晃岳、田部修士、松岡孝典、藤井隆
 - ◎参拝団体(前項以外、敬称略、順不同)
 - 長崎県連合遺族会、喇叭保存会、喇叭伝承会、千代田区、千代田区海洋少年団、二松学舎大学、洗心懇談会
 - ◎清掃奉仕(敬称略、順不同)
 - 阿含宗、桜晴れ戦没者慰霊奉仕団
 - ◎献花台奉仕者(敬称略、順不同)
 - 都古流一孝会(内田一孝、内田和宏) 和光古流(高橋理淳、汐満理和、木内理祐) 池坊宝生流(大澤勝風長谷川一翠) 柴山古流・緑山流(濱中冷雅、高畑冷恵浜本冷園、垂井冷杏) 日新流(小田切博新、佐藤寿新) 藤栄流(落合一文、倉地一博、溝淵一富)、古流わかば会(武藤理春、武藤理高、武藤理恵、秋葉理恵、金澤理代、丸山理宛)、古流茂風会(大藤茂風、鈴木泉風田巻泰風、高橋里風)、国際華道度想流(若林広峯、浅井礼心、片桐真生、吉見恵峯、伊澤理恵)



清掃ボランティア岩浅博之さん (4.8.6)

昭和天皇御製碑
秩父宮勢津子妃殿下揮毫

くのためにのら
やさげしひとの
ことおもへばむねせまり
くる

【かけがえない日本、
かけがえのない世界⑬】
どうして赤紙を断る
ことが出来なかったの？

語り部活動のなかで
小学生から質問

三重郡菟野町 佐藤 孝幸

私はいま83歳。父は昭和19年、私が5歳のとき、西部ニューギニアで戦死しました。父の戦死が家族に知らされたのが2年遅れの昭和21年、私が小学校2年生のときだったことは、令和3年5月、貴会発行の「語り継ぐ戦中・戦後」誌に掲載して頂いたとおりです。

私が70歳の頃でした。地元の小学校から「戦争の話をしてほしい」との依頼がありました。「私は戦争に行っていないから、戦争の話はできません。父が戦争で亡くなっているの、戦争の醜さ、悲しさ、平和の尊さならお話しすることができます」と答えたところ、教師は「それなんです！いまは平和教育と言って、戦争の悲惨さ、悲しさを体験者から聞いて、現在の平和がいかに貴重なものであるかを知る時代なのです。ぜひ、お父さんを戦争で亡くした

上皇陛下御製碑
常陸宮華子妃殿下揮毫

戦なき世と
歩みきつて思い出づ
かの難き日と
生きし人々

頃の様子を児童たちに話してやしてほしい」と言うことになり、毎年夏休み前になると「平和教育」のゲストテイチャーとして話に行っています。そのうち他の校区にも聞かせて行って、中高一貫の名門の私立校で、全校生の前で話したこともあります。いまの子はテレビ慣れしていますので、口頭での話だけでは飽きられますから、約20シーンのパワーポイントを作って行き、これを見せながら話すことにしています。パワーポイントの内容は、大東亜戦争の戦域図・地元に残る戦跡・これを地図に落とすとどうなる・昭和18年、父が出征するときの家族写真、49年前、私が父の戦没地を訪ねて遺骨収集に行った時の写真、等ですが、その中の1枚に、父出征のときの家族写真があります。20シーンも見せなくても、この写真1枚だけで全時間を持たせることができます。



まず、児童に聞きませう。「この写真を見てどう思いますか。モノクロ写真だから古い写真であることがわかりますね。セピア色に変色しているから、さらに古い写真であることもわかりますね。ここまで古い家族写真なら同じこと。写真の内容容を見てみましょう。単なる家族写真と違っているところは、兵隊さんの服を着ている人がいること。これが私のお父さんです。前列中央の子が私で、日の丸の小旗を持っているようです。このような写真は当時、出征する人が現地へ（常に家族と一緒に）という意味を込めて、持っていくと同時に、戦場でもし戦死したら、遺影として残すという意味です。いま考えたら悲しいことですよ。」ここで私は、父に「赤紙」と呼ばれた招集令状が来たときの様子、その後、父は戦場で戦死した。その知らせが戦死してからなんと2年後にしか家族に知らされなかったことなどを話しました。小学校4年生の授業をしたときのことでした。ある児童から質問があって、「佐藤

藤さんのお父さんはその「赤紙」とやらが来たとき、どうして断ることをしなかったのですか？」だそうです。そのとき私は「あつ！いまはそういう時代なのだ」と感ずるとともに、平和教育で「戦争の悲惨さ・平和の尊さ」を話す語り部がいつまでも続くことの必要性を痛感しました。戦争遺児の平均年齢が80歳を超えたというのですから、若い世代にその役目をバトンタッチできるように、我々戦争遺児は努力しなければならぬと思います。

墓苑便り(奉仕会だより)

1 9・10月の献花予定
帝国華道院研究部の皆さんのよる献花は次の方々です。ご来苑の際には是非ともご鑑賞下さい。

- 古流松濤会 石井 理顕
- 駿東流 小泉 恵華
- 柴山古流・緑山流 井上 冷美
- 五十鈴古流一暎派 蟹江 一伸
- 古流正華道 芦沢 千啓
- 京葉古流 小浦 一條
- 古流桜会 本加 理威
- 柴山古流・緑山流 沼田 冷笑
- 都古流一孝会 内田 一考

2 近所通信

千鳥ヶ淵戦没者墓苑は、皇居の西北に位置し、千代田区三番町にある。もちろん町内会にも所属してお祭りなどの支援も行なっているのだが、この度、田中博康町会長が来苑された際、広報紙「千鳥ヶ淵」を町内の掲示板に貼り出すことを快諾して頂いた。また町役員会の席で参加者へ配付して頂くことにもなった。ご近所に千鳥ヶ淵墓苑での諸行事が伝わり、ご近所関係の良好な維持に貢献できることを期待している。

3 秋季慰霊祭のご案内について

令和4年度千鳥ヶ淵戦没者墓苑秋季慰霊祭は、コロナ禍を考慮し出席者を200名程度に縮小して10月18日(火)に実施致します。つきましては、ご参列をご希望される全ての方をご案内できないことをご了承願います。

宝くじは、みんなの暮らしに役立っています。

宝くじは、図書館や動物園、学校や公園の整備をはじめ、災害に強い街づくりまで、みんなの暮らしに役立っています。

移動採血車
ユニバーサルデザイン施設
ピクニックテーブル
一輪車
宝くじ桜
こどもの国 ふれあい学び館
星空観察映像展示施設
ドリームジャンボ絵本
消防団防災学習・災害活動車両
テント
総合検診車
フラワープランター
地震震体験装置

一般財団法人 日本宝くじ協会
https://jla-takarakuji.or.jp/